



第21回全国棚田(千枚田)サミットが10月23日・24日に、佐賀県東松浦郡玄海町で開催されました。佐渡からの参加者は農家、行政、高校生、JAなど総勢28名。今回のテーマは棚田を未来へつなぐため、全国の棚田地域の人々による棚田保全活動の取り組みについて、意見交換や交流会などが行われました。



「景観からみた日本の心」と題した基調講演で、講師の涌井雅之氏が「土地(田んぼ・棚田・畑)を守っていく為には、それを担う農業者の生活が(収益の確保)

成り立つように保障されなければならない。」と話されました。そのほかに行政からの事例発表や棚田の現地見学が行われました。現地見学で訪れた浜野浦の棚田は、土手に石を積上げ、大小283枚の水田で構成されており地域の方々の努力で観光地化が進み、最近では田植え前の水田に水が張られた美しい風景を見に来る観光客が多くなったと紹介されました。来年の22回全国棚田サミットは佐渡で開催されることが決定しています。サミットに向けて市・JA佐渡等が連携し、佐渡の良さを全国に届けてサミットを盛り上げていきたいと思ひます。



第19回ふれあいアッセまつりが11月3日に、佐渡広域総合流通センターで開催されました。開始から大勢の家族連れが訪れ、即売会や競り体験などを楽しんでいました。お米の等級当てコーナーでは、真剣にコーナー担当者の説明を聞き、挑戦する来場者の姿が見られました。佐渡の特産品や地元のとれたての野菜も出品され、大勢(約5000名)の来場者で賑わいました。



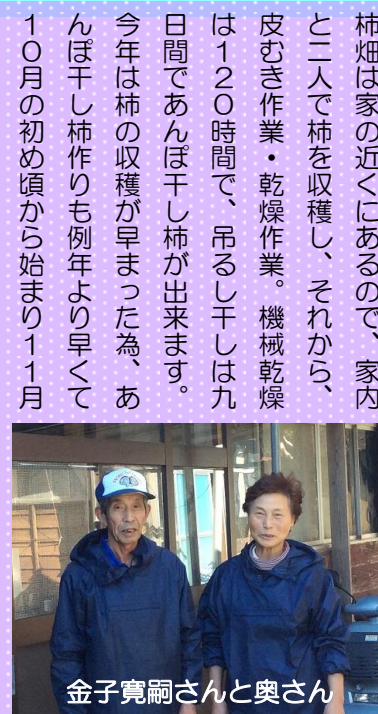
「**佐渡のお米と産直ミニフェア**」が10月30日に、東京米マイスター麹町の店頭で開催されました。当日は佐渡産コシヒカリ「朱鷺と暮らす郷」米をはじめ佐渡の特産品販売や、米の試食会を行いました。佐渡米を食べたお客様は「今年も佐渡のお米は甘みがあって、モチモチしていて美味しい」と好評でした。一緒に販売していた野菜や特産物も好評で、夕方には完売となりました。



ふゆみずたんぼ 佐渡では秋の収穫が終わると、田んぼに写真のような形(溝)が見られます。これは「ふゆみずたんぼ」といって、「生きものを育む」農法の一つで、年間を通じて生きものの生息する環境を維持するために行う技術の1つです。トラクターでわだちを作る事で、水がたまりやすくするものです。湿地状態を維持することで水生生物が育まれ、豊かな生態系を創造するために行っています。



あんぼ干し柿作りー金子寛嗣かねこひろしゆんさん
金子寛嗣さんは今年74歳で、専業農家として水田300a、柿40a、水稻苗販売等に取り組んでいます。金子さんは「あんぼ干し柿を作り始めたのは20年前、収益の面から考えると、生柿より干し柿のほうが良いので平成12年に、専用機械等を購入し本格的に始めました。柿畑は家の近くにあるので、家内と二人で柿を収穫し、それから、皮むき作業・乾燥作業。機械乾燥は120時間で、吊るし干しは9日間であんぼ干し柿が出来ます。今年は柿の収穫が早まった為、あんぼ干し柿作りも例年より早く10月の初め頃から始まり11月下旬までの期間で行う予定です。出荷量は7000〜8000パックを目指しています。この期間は作業で毎日大変忙しいです。私たちの集落は、中山間地なので田んぼは棚田になっていて、特にあぜの草刈作業が大変です。高齢化が進み、当初8軒あった柿農家は、現在3軒ほどになりました。集落の農業を守っていくには、やはり集落営農組織の存在が重要で、地域で協力して農業を続け、地域の農業を守ることが大切だと考えています。」とおっしゃっていました。



金子寛嗣さんと奥さん

編集人：佐渡農業協同組合

営農事業部米穀販売課 渡部・買(まい)

beikokuka.hanbai@ja-sado-niigata.or.jp

発行日：平成27年11月